

# 書き言葉と話し言葉の文末表現

— 媒体・男女間の差異 —

橋 本 梨 沙

## 1. はじめに

日本語の特徴の一つとして「女性語」や「男性語」といった女性と男性の言葉の違いが挙げられる。しかし近年においては、女性が女性語を使わないことによる、男女間の言葉の接近が指摘されている<sup>1</sup>。その一方で、小説や漫画、ドラマなどでは依然として男女間での言葉に差異があるように感じ、「話し言葉」と「書き言葉」という媒体の違いも大きく影響しているのではないかと考えた。本稿では、話し言葉と書き言葉における会話を以下の表のように分類し、【話し言葉の自然発話】、【話し言葉の作られた発話】、【書き言葉の作られた発話】のそれぞれに見られる文末表現に観点を置き、「媒体（音声か文字か）での言葉の差異」と「男女間での言葉の差異」を考察した。尚、【書き言葉の自然発話】は今回調査対象外とした。

	自然発話	作られた発話
話し言葉	日常談話	アニメ、ドラマなど
書き言葉	チャットなど	漫画、小説など

## 2. 言葉の定義

### 2.1. 「書き言葉」と「話し言葉」について

『日本語学研究事典』において、「書き言葉」は従来〈文字によって書かれた言葉〉とされてきたが、ニュース原稿など音声化されることを前提として書かれるも

<sup>1</sup> 尾崎喜光（2004）「日本語の男女差の現状と評価意識」『日本語学』23〔7〕, 48-55.  
「男女差が縮小すると言った場合、女性側から男性側への接近による可能性と、男性側から女性側への接近による可能性とが考えられるが、多くの指摘は前者である。」などによる指摘が挙げられる。

のもあることから、近年は「文字によって書かれた、読まれることを意図したことば」のように定義されている」とある。(1) 公共性の高い一般的知識を(話題)、(2) 知識の伝達重視の姿勢で(コミュニケーションの姿勢)、(3) 整えられ、圧縮された表現で、発せられるものが典型的な「書き言葉」であるとされる。一方で「話し言葉」は、音声を媒体とすることばで、(1) 公共性の低い個人的体験を(話題)、(2) 聞き手との共存重視の姿勢で(コミュニケーションの姿勢)、(3) 事前の準備なしに冗長な表現で発せられるものを典型的な「話し言葉」としている。

本稿では、まず音声か文字かという観点で考えた。日常での会話、つまり自然談話は音声で表現され、かつ『日本語学研究事典』における典型的な話し言葉に当てはまるため【話し言葉の自然発話】と定義・分類した。ドラマの台詞は聞き手に伝える媒体が音声であるため「話し言葉」と捉えたが、予め脚本家によって書かれたもの=作られたものでもあるため【話し言葉の作られた発話】と定義・分類した。小説の会話文は文字で書かれているかつ著者によって作られたものであるため【書き言葉の作られた発話】と定義・分類した。また、本稿では調査対象としなかった【書き言葉の自然発話】は、媒体としてはチャットやLINE(通話メッセージアプリ)での発話が挙げられる。それらでの発話は文字を媒体としているので「書き言葉」であるが、相手からのメッセージに対して比較的即時的に発話をするため、自然発話に近いのではないかと考えたため【書き言葉の自然発話】と定義・分類した。

## 2.2. 「女性語」と「男性語」、「文末表現」について

『日本語学研究事典』では、「現在「女性語」の特徴は、女性の専用終助詞・人称詞・感嘆詞の使用と、動詞の命令形不使用などにあるとされる」と記載されているが、本稿では「終助詞」に焦点を当て、男女差を見ていく。『日本国語大辞典』の「女性語」の項目では、終助詞の「わ」「だわ」「よ」「のよ」を女性語として挙げており、『日本語百科大事典』の「女性語」の項目においては、「終助詞「わ」「のよ」「かしら」は女性特有、「ぞ」「ぜ」「な」「かぁ」は男性特有であり、「ね」「の」は女性に、「よ」「か」は男性により多く用いられる」と記載がある。また、『国語学大辞典』の「女性語」の項目においては、「終助詞「ぜ・ぞ・な」は男性が使い、「よ・ね・わ・かしら」は女性が使う」とある。

これらの3つの事典を参考に、「女性語」=「わ・だわ・のよ・かしら・ね・の」、「男性語」=「ぜ・ぞ・な・か」と定義した。

「文末表現」という表現については、「だよ」「だね」という表現は〈断定の助動詞＋終助詞よ〔ね〕〉という表現であり、純粋な終助詞ではない。そのため本稿ではそれらをすべて含めて「文末表現」という言葉を用いる。

### 3. 調査対象

今回調査対象とするものは以下の通りである。

**【話し言葉の自然発話】**：同性同士の2人或いは3人での対談動画、対談音声を対象とする。

**【話し言葉の作られた発話】**：若者が主人公であるドラマの台詞を対象とする。

**【書き言葉の作られた発話】**：若者が主人公である小説の会話文を対象とする。

対象とする人物、作品を選ぶ際には以下の4点を条件とした。

- ①標準語を用いる人物の発話であること
- ②なるべく年齢での差が出ないように10代後半～20代の発話を対象とすること
- ③ドラマと小説の場合、作者や脚本家が日本人であること
- ④ドラマと小説の場合、特殊な言葉遣いが出てくるようなファンタジーなものではなく、現実的な世界の話であること

尚、人物の前にあるアルファベットと数字は〈H：話し言葉〉、〈K：書き言葉〉、〈S：自然発話〉、〈T：作られた発話〉、〈f：女性〉、〈m：男性〉を表す。

#### 3.1 【話し言葉の自然発話】

インターネット動画サイトに上げられている、二人の人物が司会者を挟まずに、与えられた話題に沿ってフランクに話す動画や音声を対象とする。

表 3.1-1. 対談の調査対象表（女性）

	名前	当時の年齢
HS-f1	秋元 才加	22 歳
HS-f2	河西 智美	17 歳
HS-f3	小森 美果	15 歳
HS-f4	佐藤すみれ	16 歳
HS-f5	篠田麻里子	23 歳
HS-f6	高柳 明音	20 歳
HS-f7	仁藤 萌乃	18 歳
HS-f8	前田 亜美	14 歳
HS-f9	松井 玲奈	20 歳
HS-f10	峯岸みなみ	17 歳
計	10代6人、20代4人	

表 3.1-2. 対談の調査対象表（男性）

	名前	当時の年齢
HS-m1	井上 正大	20 歳
HS-m2	大山 達也	25 歳
HS-m3	斉藤 工	24 歳
HS-m4	佐藤 祐基	23 歳
HS-m5	徳山 秀典	25 歳
HS-m6	戸松 公人	19 歳
HS-m7	長谷山 敬	25 歳
HS-m8	水嶋 ヒロ	23 歳
HS-m9	三津谷 亮	24 歳
HS-m10	村井 良大	21 歳
計	10代1人、20代9人	

〈対談の組み合わせ〉※カッコ内は出典である

#### 【女性】

- ・ HS-f1（週刊 AKB vol.10 2011/4/16）
- ・ HS-f2 — HS-f5（週刊 AKB vol.2 2009/11/21）
- ・ HS-f3 — HS-f4 — HS-f8（週刊 AKB vol.6 2010/5/22）
- ・ HS-f6 — HS-f9（週刊 AKB vol.5 2010/3/12）
- ・ HS-f7 — HS-f10（週刊 AKB vol.7 2010/10/23）

※ HS-m3 の対談相手は 100 発話集まらなかったため、調査対象から除外した。

※ HS-f1、HS-m5、HS-m9、HS-m10 は人数調整のためそれぞれ単体

#### 【男性】

- HS-m1 — HS-m6（仮面ライダーディケイド DVD vol.7 2010/01/21）
- HS-m2 — HS-m7（ニコニコ動画『25歳二人が語ってみた』【栄養士】大山達也&長谷山敬【ピロガー】）
- HS-m4 — HS-m8（仮面ライダーカブト DVD vol.11 2007/06/21）
- HS-m3（ミュージカル「テニスの王子様」ベストアクターズシリーズ 004 2006/7/26）
- HS-m5（仮面ライダーカブト DVD vol.10 2007/05/21）
- HS-m9（D2 学園（インターネットラジオ）2012/02/16）
- HS-m10（仮面ライダーディケイド DVD vol.6 2009/12/11）

### 3.2. 【話し言葉の作られた発話】

2005 年～ 2012 年に放送された若者が主人公であるドラマの台詞を対象とし、以下の表に挙げたドラマ 6 作品より男女 10 人ずつを対象とする。

表 3.2-1. ドラマの調査対象表 ※カッコ内は初回放送日である

	作品名	女性人物		年齢	男性人物		年齢
		HT-f	俳優名		HT-m	俳優名	
1	スイッチガール (2011年12月24日)	HT-f1	田宮 仁香	17歳	HT-m1	神山 新	17歳
2	GTO (2012年7月3日)	HT-f2	相沢 雅	高2	HT-m2	鬼塚 英吉	25歳
		HT-f3	桑江 遥	高2	HT-m3	村井 國男	高2
3	美男ですね (2011年7月15日)	HT-f4	桜庭 美子 (美男)	20歳	HT-m4	桂木 廉	23歳
		HT-f5	NANA	20代	HT-m5	本郷 勇気	21歳
			—	—	HT-m6	藤城 柊	23歳
4	未来日記 (2012年4月21日)	HT-f6	古崎 由乃	19歳	HT-m7	星野 新太	21歳
5	野ブタ。をプロデュース (2005年10月15日)	HT-f7	小谷 信子	高2	HT-m8	桐谷 修二	高2
		HT-f8	上原まり子	高2		—	—
6	ラスト・フレンズ (2008年4月10日)	HT-f9	藍田美知留	22歳	HT-m9	及川 宗佑	24歳
		HT-f10	岸本 瑠可	22歳	HT-m10	水島タケル	22歳
合計		10代6人、20代4人			10代3人、20代7人		

### 3. 3. 【書き言葉の作られた発話】

2001年～2011年に発行された若者が主人公である小説の会話文を調査対象とした。以下に挙げた小説6作品より男女10人ずつを対象とする。

表 3.3-1. 小説の調査対象表 ※作品名の下は著者と発行日である

	作品名	女性		年齢	男性		年齢
1	チーム 堂場瞬一 (1963 年生まれ) 2008 年 10 月 17 日		—	—	KT-m1	浦 大地	大 4
2	樹上のゆりかご 萩原規子 (1959 年生まれ) 2011 年 3 月 25 日	KT-f 1	上田ひろみ	高 2	KT-m 2	加藤 健一	高 2
		KT-f 2	中村 夢乃	高 2	KT-m 3	鳴海 知章	高 2
		KT-f 3	近衛 有理	高 2		—	
3	氷菓 米澤穂信 (1978 年生まれ) 2001 年 11 月 1 日		—	—	KT-m 4	折木奉太郎	高 1
					KT-m 5	福部 里志	高 1
4	武士道セブンティーン 誉田哲也 (1969 年生まれ) 2008 年 7 月 10 日	KT-f 4	西荻 早苗	高 2		—	—
		KT-f 5	磯山 香織	高 2			
5	夜のピクニック 恩田陸 (1964 年生まれ) 2004 年 7 月 30 日	KT-f 6	甲田 貴子	高 3	KT-m 6	西脇 融	高 3
		KT-f 7	後藤 梨香	高 3	KT-m 7	戸田 忍	高 3
6	冷たい校舎の時は止まる (上) 辻村深月 (1980 年生まれ) 2004 年 6 月 5 日	KT-f 8	辻村 深月	高 3	KT-m 8	鷹野 博嗣	高 3
		KT-f 9	佐伯 梨香	高 3	KT-m 9	藤本 昭彦	高 3
		KT-f10	桐野 景子	高 3	KT-m10	菅原	高 3
合計		10 代 10 人			10 代 9 人、20 代 1 人		

### 3. 4. 調査方法

調査対象に挙げた人物一人につき 100 発話ずつ<sup>2</sup>抜き出し、それぞれがどのような文末表現を使用しているかを見ていく。データを集める上で留意した点は以下の 5 点である。

#### ① 1 発話の数え方

自然談話とドラマの場合＝一息で話している所までを 1 発話とカウントする

小説の場合＝句点で区切る

(例) KT-m9「雪だねえ。俺、朝起きてびっくりしちゃった。寒いねー、めっちゃめっちゃ寒い」→ 3 発話

#### ② 回想場面、心の中の声 (実際に発声していないもの) は対象外とすること

#### ③ 相手の発話に被る相槌はカウントしないこと

#### ④ 間投助詞的に使われているものはカウントしない

(例) HS-m4「あそこね、しかも足場悪かったもんね」→「ね」は間投助詞なので文末表現としての「ね」としてカウントしない。(この場合、文末表現は「もんね」としてカウント)

<sup>2</sup> 基本的には冒頭から 100 発話だが、途中あいづちしか発話がない部分などは抜かした。

⑤倒置法になっている場合は文末表現としてカウントする

(例) KT-f7「使い古しね、やっぱ」→「やっぱ、使い古しね」と判断し、終助詞「ね」の使用と考える。

文末に文末表現が用いられていない場合、または今回文末表現とは認めなかったものとしては以下のようなものが挙げられる。

(1) あいさつ

HT-f2：おはようございます

KT-f4：……ごめんくださあい

(2) 感動詞

HT-f3：ええ？

HT-m2：おい！

(3) 終助詞以外の助詞

HS-f2：あとは～どうやったらそんなに身長が伸びるの？とか、細くなれるのとか

HS-m10：だからこうギリギリをね、やんなきゃいけなかったけど

(4) 言い切りの表現（助動詞「だ」を除く）

HS-f2：そうすごいそれ言われる

HS-f7：え、なんでみーちゃんなんだろうと思った

(5) 言いさし、省略

HS-f5：週刊 AKB の後藤 P と対談して聞いてて

HS-f10：なんか、萌乃はあ～なんだろうな、結構…

以上を踏まえ、文末を見ていくと以下の 76 種類の文末表現が抽出された。

か、かい、かな、かね、かよ、かしら、さ、ぜ、ぞ、な、なの、なのか、なのかよ、なのさ、なのね、なのよ、なよ、N (A) + ね、ね、の、のか、のかい、のかな、のかよ、のさ、のだよ、のね、のよ、のよね、よ、N (A) + よ、よな、よね、わ、わよ、わよね、だ、だい、だがな、だぜ、だぞ、だな、だね、だよ、だよな、だよね、だろ、だろう、だろうか、だろうさ、だろうな、だろうね、だわ、でしょ (う)、でしょうか、でしょうかね、でしょうかね、でしょうよ、じゃん、だし、だしさ、だしね、し、しさ、しな、しね、もん、もんな、もんね、だもん、だもんな、だもんね、だもの、もの、ものね、や

これらを大まかに分類すると以下の 9 通りになる。

- (1) 終助詞単体の表現：「か、かしら、さ、ぜ、ぞ、な、ね、の、よ、もの（撥音化した「もん）、や」  
 ※「ね」と「よ」は名詞（形容動詞の語幹）に接続した場合は女性の使用とされるため「N (A) + ね / よ」と分けた。
- (2) 終助詞と終助詞が複合した表現：「かい、かな、かね、かよ、なよ、よな、よね、わよ、わよね、ものね（撥音化した「もんね）、もんな」
- (3) 断定の助動詞「だ」（or 形容動詞語尾の「だ」）の連体形 + 準体助詞「の」、それに終助詞が付いた表現：「なのか、なのかよ、なのさ、なのね、なのよ」
- (4) 準体助詞「の」に終助詞が付いた表現：「のか、のかい、のかな、のかよ、のさ、のだよ、のね、のよ、のよね」
- (5) 断定の助動詞「だ」、それに終助詞が付いた表現：「だい、だがな、だぜ、だぞ、だな、だね、だよ、だよな、だよね、だわ、だもん、だもんな、だもんね、だもの」
- (6) 断定の助動詞「だ」の未然形 + 推量の助動詞「う」、それに終助詞が付いた表現：「だろ、だろう、だろうか、だろうさ、だろうな、だろうね」
- (7) 丁寧な断定の助動詞「です」の未然形、それに推量の助動詞「う」がついた表現、終助詞が付いた表現：「でしょ（う）、でしょうか、でしょうかね、でしょうね、でしょうよ」
- (8) 接続助詞「し」が付く表現：「だし、だしさ、だしね、し、しさ、しな、しね」
- (9) じゃん：「ではないか」→「じゃないか」→「じゃんか」→「じゃん」という変遷で転訛したものであるが、一般的に終助詞とされているので、終助詞扱いとした。

## 4. 調査結果

### 4.1. 三者の文末表現種類数

全76種類の文末表現のうち、それぞれの媒体の男女に見られた文末表現の種類数は以下の表4.1-1に示した通りである。

表 4.1-1. 媒体男女別使用文末表現種類数

	女性	男性
自然談話	34	39
ドラマ	32	38
小説	52	53

また、それぞれの媒体での発話全体における文末表現が用いられた発話の割合は、

【自然談話】 女性：42% 男性：55%

【ドラマ】 女性：39% 男性：54%

【小説】 女性：53% 男性：59%

となり、いずれの媒体においても女性より男性の方が若干ではあるが使用文末種類数が多く、男性の発話の方が文末表現が多く用いられるという結果となった。

小説において男女とも使用文末表現種類数が一番多く、小説の女性と自然談話・ドラマの女性では約 1.5 倍、小説の男性と自然談話・ドラマの男性では約 1.4 倍の差がある。小説が自然談話とドラマより使用文末表現の種類が多いのは、小説が文字情報のみであり、各キャラクターの見分けをつけるのが難しいためであると考えられる。

種類数だけを見ると、【話し言葉の作られた発話】であるドラマは、男女ともに【話し言葉の自然発話】である自然談話と男女ともほぼ同数となった。【作られた発話】としては同じ分類である小説とは大分差がある。このことから、ドラマは【作られた発話】よりも【自然発話】に近いと考えられるが、用いられている文末表現の詳細を見ていくことで明らかにする。

## 4.2. 【話し言葉】と【書き言葉】の観点から

76 種類の文末表現のうち、一つの媒体にしか見られなかった文末表現は以下の通りである。カッコ内はその種類数である。ちなみに、【自然発話】のみに見られた文末表現は 0 である。

【ドラマ】のみに見られた表現 (4)：でしょうか、ものね、わよね、わよ

【小説】のみに見られた表現 (22)：かい、だい、のかい、だろうか、なのか、かしら、だろうさ、なのさ、のさ、だぜ、しな、だがな、だしね、でしょうかね、のよね、でしょうよ、なのかよ、のだよ、のよ、だわ、だもの、もの

76 種類のうち 28% の文末表現が小説にしか見られないものである。いずれも使用者が少ないことが特徴であった。同じ作品の中でも上の表現を用いている人物と用いていない人物がいるため、キャラ付けのための使用であると考えられる。また、この 2 つは【作られた発話】であるので、両者にしか見られなかった表現はまとめて【作られた発話】のみに見られた表現と言い換えることが出来る。【作られた発話】のみに見られた 26 種類の表現は、体感的に同年代の男女が自然談話において使う印象がないものが多いため、【自然発話】と【作られた発話】には隔たり

があることが分かった。

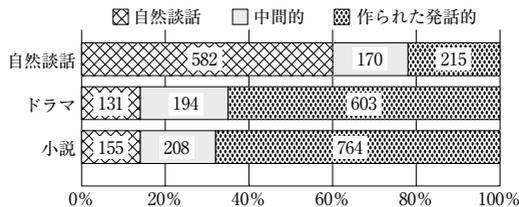
次に【話し言葉の自然発話（自然談話）】とその対極にある【書き言葉の作られた発話（小説）】に見られた計72種類の文末表現の合計数を出し、自然談話での使用が100%～65%の表現を〈自然発話的〉、64%～35%の表現を〈中間的〉、34%～0%の表現を〈作られた発話的〉とした。その結果が表4.2-1である。それにドラマで見られた文末表現を加えるとグラフ4.2-2のようになる。

表 4.2-1. 文末表現の性質分類

自然発話的 =〈話し言葉的〉(12)	わ、もんな、もんね、だよね、よね、じゃん、だもんね、N(A)+ね、ね、しね、だね、のね
〈中間的〉(13)	だろうね、もん、し、なのね、でしょうね、かね、のかな、だしさ、の、でしょ(う)、さ、だし、かな
作られた発話的 =〈書き言葉的〉(47)	や、よな、か、よ、だよ、N(A)+よ、なの、だろうな、しさ、だろ、だ、だろう、かよ、だよな、なよ、な、だな、だもん、のか、のよ、のかよ、なのよ、だしね、だもんな、だがな、しな、だぞ、ぞ、だぜ、ぜ、もの、だもの、だわ、のだよ、なのかよ、でしょうよ、のよね、でしょうかね、のさ、なのさ、だろうさ、かしら、なのか、だろうか、のかい、だい、かい

※ドラマにしか見られなかった「でしょうか、ものね、わよね、わよ」除外してある

※表中の「わ」はイントネーションが下がるもの。(いわゆる「女性語」の「わ」はイントネーションが上がるもの)



グラフ 4.2-2. 媒体における文末表現の性質比較

ドラマでの発話では、〈自然発話的〉な表現が全体の14%、〈中間的〉な表現が21%、〈作られた発話的〉な表現が65%を占めている。グラフを見ても一目瞭然であるが、ドラマは小説とほぼ同じような割合となっている。ドラマは使用文末種類の値は自然談話とほぼ変わりがなかったが、実際に使用している文末表現は小説に近いという結果となった。このことから、ドラマで若者が用いる文末表現は、〈自然発話的〉というよりも〈作られた発話的〉であるという結論に至った。

### 4.3. 「女性語」、「男性語」の観点から

黒須（2006）の分類を参考に、76種類の文末表現を女性の使用が100%～80%のものを〈非常に女性的〉、79%～60%のものを〈やや女性的〉、59～40%のものを〈中性的〉、39%～20%のものを〈やや男性的〉、20%未満のものを〈非常に男性的〉と分類したものが表4.3-1である。

全体のうち、32%が女性的な表現、46%が男性的な表現、22%が中性的な表現という結果になった。男性的な表現の占める割合が高い。これは男性の方がより多種多様な文末表現を用いるためである。

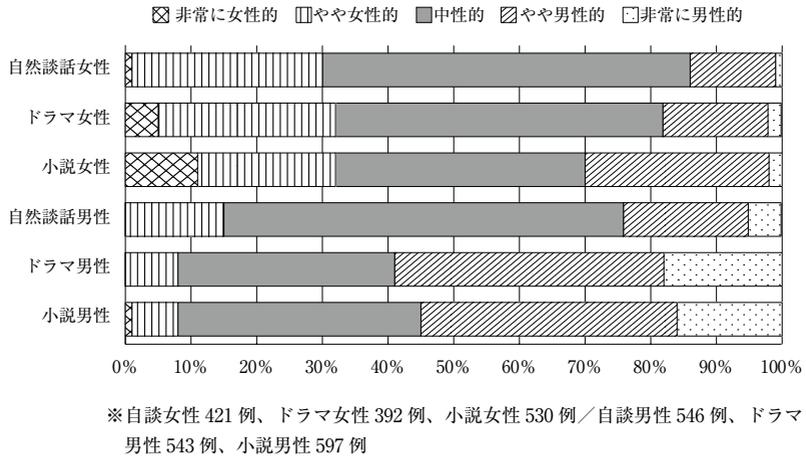
一般に「女性語」である「だわ」「のよ」「かしら」が〈非常に女性的〉に分類された。他に女性的な表現として分類されたのを見ると、元々女性的な表現に更に終助詞「ね」が付いた表現が多い。「なのさ」「だろうか」は、「男性語」とされる「か」と「さ」が後ろについた表現であり、使用例も1例しかないため、女性的な表現であるとは言い切れないが、女性でも「男性語」の「か」と「さ」が含まれる表現を使うということが分かった。男性的な表現として分類されたものは、基本的に「男性語」である「ぜ」「ぞ」「な」「さ」とそれが含まれる表現が多い。しかし、一般に女性的な表現とされる「のね」は〈やや男性的〉に分類された。「のね」は男性4人に用いられたがいずれも自然談話の男性であった。自然談話では一般に男性的とされる「かよ、かね、だろうな」といった表現が女性のみに見られたことも考えると、自然談話では言葉の男女差はもはやないのではないかと<sup>3</sup>。

表 4.3-1. 文末表現の性別分類

非常に女性的 (18)	だもの、だわ、わよ、のよ、のだよ、なのよ、でしょうよ、わよね、ものね、のよね、でしょうね、でしょうかね、なのさ、かしら、だろうか、N(A)+よ、だもん、もの
やや女性的 (6)	なの、でしょ(う)、のかな、の、もん、よね
中性的 (17)	N(A)+ね、しね、かな、し、もんね、だろうね、や、わ、なのね、だもんね、だろうな、よ、だね、だよね、かね、ね、か
やや男性的 (12)	だし、じゃん、だよ、だろう、のね、しな、だしさ、な、だ、のか、だよな、だな
非常に男性的 (23)	ぞ、よな、さ、なよ、かよ、だろ、のかよ、なのかよ、だしね、もんな、だもんな、だがな、だぞ、だぜ、ぜ、のさ、だろうさ、しさ、なのか、でしょうか、のかい、だい、かい

<sup>3</sup> 女性による「かよ、かね、だろうな」の使用例を見ると、「かよ」は「ほんとかよー？」という語尾を伸ばした疑問で使われ「かよ」と言い切るよりも柔らかく感じる。「だろうな」は「萌乃は、なんだろうなあ…」と断定ではなく詠嘆的に使われ、「かね」は「2、3曲でしたかねえ?」「でもまとめ役なんじゃないですかね?」と「です」に付き、疑問としての使用である。いずれも断定を避けたやわらかい言い方のため、女性にも用いられたのではないかと考えられる。

ここで、媒体と男女差の関係を明らかにするために、それぞれの媒体の男女が用いた文末表現の性別比率を示したものがグラフ 4.3-2 である。



グラフ 4.3-2. 媒体・男女別文末表現の性別比較

女性同士を比較すると、〈非常に女性的〉な表現と〈やや女性的〉な表現を合わせた使用例数の割合は三媒体で大きな差はないが、自然談話において女性はより女性らしい表現を用いることが少ないことが分かる。

また、〈非常に男性的〉〈やや男性的〉な表現の使用例数は小説が最も高い。小説の女性は、男性的な表現を他の女性人物よりも多用している人物が2名いたのこういった結果になったが、それはつまり小説では女性にも男性的な表現を使用させ、人物を作り上げているということだろう。小説の世界観において個性を出すための男性的表現使用である。

ドラマでは、女性は女性的な表現を自然談話よりも使い、男性は男性的な表現を自然談話よりも用いている。しかし、ドラマの女性は女性的な表現よりも〈中性的〉な表現の割合が多い。グラフ 4.2-2 から分かるように、ドラマの人物に使用された文末表現は自然発話的な表現が少なかった。しかし、言葉の性差を考えたとき、今回調査対象としたドラマの女性は「女性語」の使用が少なかった。これについては水本（2010）が「現実の若い女性たちは、すでにベールは脱ぎ捨て、普段使うことばで、あるいは、時として男性度の高いことばを使用して自己主張をする。この現実の変化をふまえ、若い世代には女性文末詞を使わせないという脚本家も存在する。また、この数年間で、とくにトレンドドラマの領域においては、若い女

性による女性文末詞使用も減少傾向にある」と述べていることから、ドラマの女性にはより自然発話に近づくように「女性語」を使用させなかったと考えられる。そして、ドラマの女性が用いる文末表現の性差について考えたとき、自然談話と小説の中間的な存在であると言えるのではないか。

一方で、男性同士を比較すると、〈非常に男性的〉〈やや男性的〉な表現を合わせた使用例数の割合は、ドラマは59%、小説は55%とあまり差がないが、自然談話は23%となり、2倍以上差がある結果となった。そして、自然談話の男性は、ドラマと小説の男性よりも女性的な表現を用いている。自然談話では女性も男性も〈中性的〉な表現を多く用いていることから、現代の若者の言葉には性差があまりないと言うことが出来る。

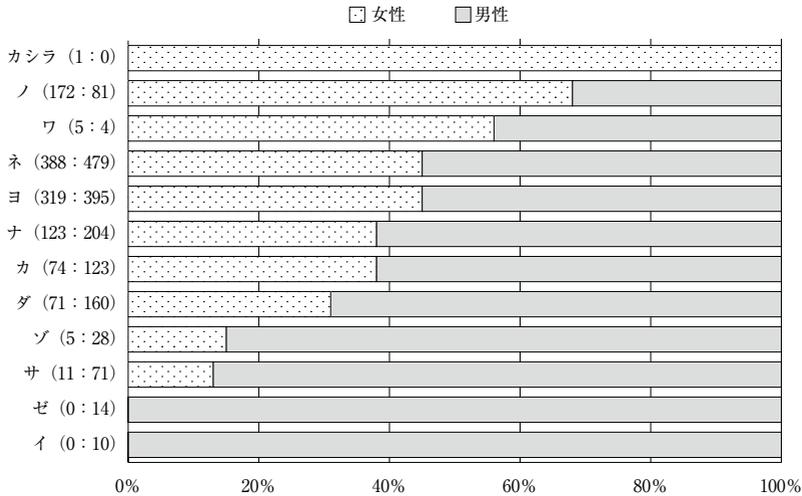
先に述べたようにドラマの女性が用いる文末表現の性別は自然談話と小説の中間的であったが、ドラマの男性はそうでないようである。ドラマの男性の使用文末表現の性別の割合は、小説の男性のものと酷似している。寧ろ小説の男性よりも男性的な表現の使用が多い。【作られた発話】においては、男性は依然として男性的な表現を用いており、自然談話の男性の発話、つまり【自然発話】とは隔たりがあるということである。なお、全76種類の文末表現を全ての媒体の男女を統合した結果で男女比率を表したグラフは付録を参照して欲しい。

#### 4.4. 終助詞に着目して

文末表現をより後ろの終助詞で分類し<sup>4</sup>、全ての媒体を総合した上での男女の比率を表したのがグラフ4.4-1である。女性の使用が100%～80%のものを〈非常に女性的〉、79%～60%のものを〈やや女性的〉、59～40%のものを〈中性的〉、39%～20%のものを〈やや男性的〉、20%未満のものを〈非常に男性的〉な表現とする。

---

<sup>4</sup> 「かな、よな、だかな、だな、だよな、だもんな」を終助詞「な」にまとめる等、複数の表現をひとつの助詞にまとめている。このように分類したものは、便宜上カタカナで示す。



グラフ 4.4-1. 終助詞別男女比

「女性語」である「カシラ」は、例数こそ少ないが今回の調査でも〈非常に女性的〉に分類された。同じく「女性語」である「ノ」は〈やや女性的〉な表現となり、一般的な認識とずれはない。「ワ」「ネ」「ヨ」は〈中性的〉に分類されたが、本来「ワ」「ネ」は「女性語」のはずである。男性の使用も多かったため〈中性的〉となったことから、男性の言葉も女性の言葉に接近していると考えられる。文献によって「女性語」「男性語」の判断が揺れている「ヨ」は、現代では女性も男性も使用する〈中性的〉な表現であることが分かった。しかし、「N(A)+よ」は今回〈非常に女性的〉という結果となり、依然として女性的な表現である。「ナ」「カ」「ダ」は〈やや男性的〉、「ゾ」「サ」「ゼ」「イ」は〈非常に男性的〉となり、「女性語」とされるものより、「男性語」とされるものの方が一般的な認識とずれがない。

卒論では更に、主な文末表現について媒体差や男女差を明らかにすることが出来た。特に興味深い結果となったのが「ね」と「よ」である（単体で用いられたもの）。【自然発話】では「ね」が多く用いられ、【作られた発話】では「よ」が多く用いられた。「ね」は主張を和らげ、さらに相手に同調するニュアンスを持たせることが出来るため【自然発話】で用いられやすく、「よ」は相手に強く自分の意見を伝える性質があるため【自然発話】では使用されにくいと考えた。このことから、終助詞をただ単に女性的・男性的と判断するだけでなく、終助詞の意味をボライトネスの観点で考えて媒体差を明らかにすることも可能だと気付くことが出来た。

## 5. おわりに

本稿では、【話し言葉の自然発話】、【話し言葉の作られた発話】、【書き言葉の作られた発話】で用いられる文末表現の媒体差と男女差を分析した。

自然談話と小説で用いられる文末表現の間には種類数や使用数に大きな開きがあることが分かり、これはつまり【話し言葉の自然発話】と【書き言葉の作られた発話】は対極な存在であり、二者の間には隔たりがあると言い換えることが出来る。

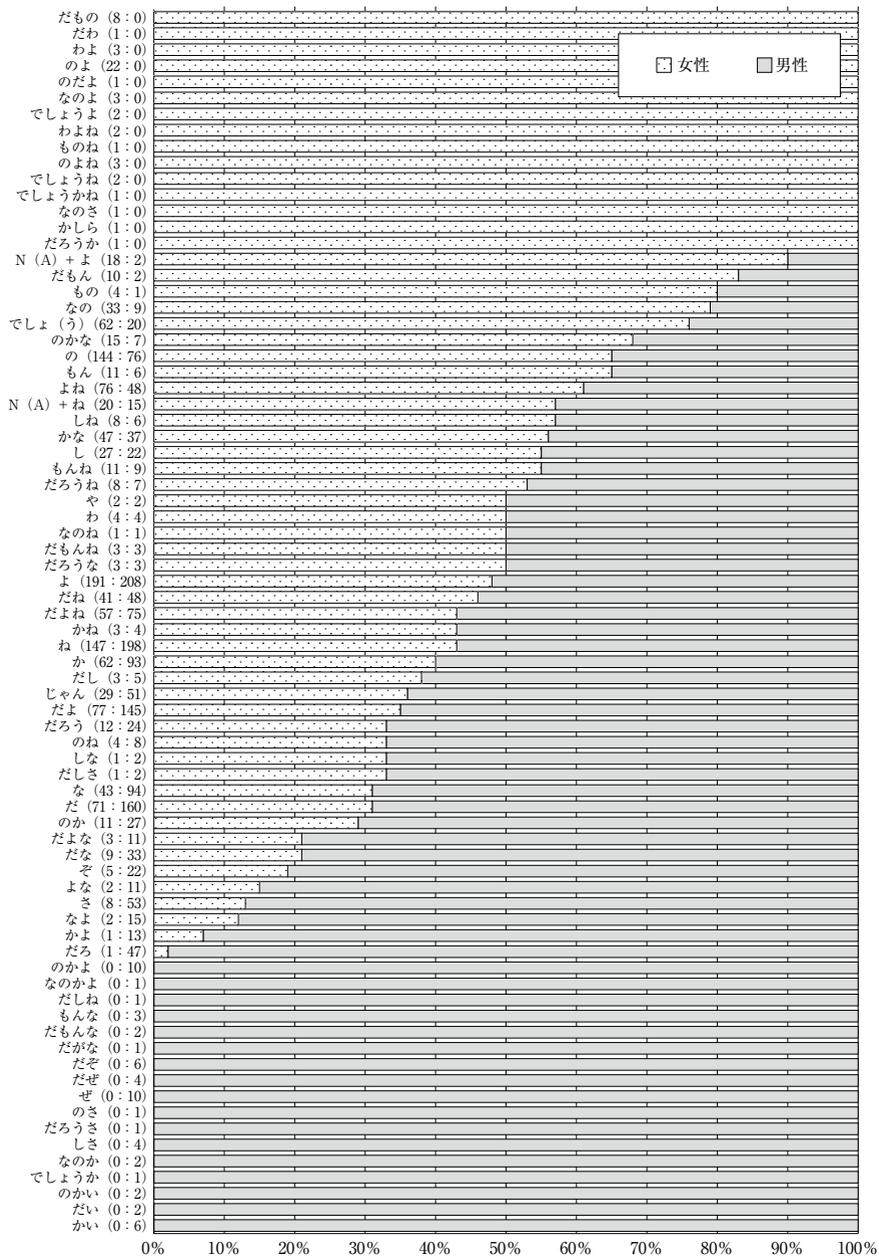
ドラマで用いられる文末表現は〈書き言葉的〉であることが分かったが、ドラマの女性を用いた文末表現の性差を見ると、小説よりも自然談話に近いことが分かる。このことから、ドラマは自然談話と同じ【話し言葉】である一方で、小説と同じ【作られた発話】的な側面も持っており、その性質は多少【作られた発話】にひばられているが、4.3で述べたように、ちょうど自然談話と小説の間であると言える立ち位置と言える存在ではないかと考えることが出来る。しかし、ドラマの男性を用いた文末表現は自然談話よりも小説に似たものとなり、何故ドラマの女性は自然談話に近いのに、男性は小説に近いのか。それを明らかにすることが今後の課題である。

自然談話では男女ともに〈中性的〉な表現を多く用いていることが分かり、近年言われている女性による「女性語」の不使用を裏付けるとともに、男性の言葉も中性化し、男女の言葉が接近しているということを裏付ける結果が得られた。

### 参考文献

- 尾崎喜光 (2004)「日本語の男女差の現状と評価意識」『日本語学』23 [7], 48-55.
- 黒須理紗子 (2006)「女ことば・男ことばの研究—差異と変遷—」東京女子大学日本文学科 2006 年度卒業論文
- 水本光美 (2010)「テレビドラマ—“ドラマ語”としての「女ことば」」中村桃子編『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社 p89-105
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2002)『日本国語大辞典』第二版, 小学館 [女性語]
- 国語学会編 (1980)『国語学大辞典』東京堂出版 [女性語]
- 金田一春彦他編 (1988)『日本語百科大事典』大修館書店 [女性語]
- 飛田良文他編 (2007)『日本語学研究事典』明治書院 [書き言葉][話し言葉][女性語]

〈付録〉文末表現の男女比率（女性 1343 例：男性 1686 例）



(はしもと りさ 2013 年日文卒)